

平成20年度版

観光の実態と志向

第27回 国民の観光に関する動向調査



1. 調査目的

国民の観光旅行の動向を明らかにし、諸施策を推進するための基礎資料の作成を目的とする。

2. 調査項目

- (1) 過去1年間(平成19年4月～平成20年3月：以下同様)の宿泊旅行の概要
- (2) 過去1年間の宿泊観光旅行
- (3) 今後の観光旅行の志向
- (4) その他

3. 調査の設計

- (1) 対象地域 全国
- (2) 調査の対象 全国民
*対象地点のサンプリングは満0歳以上の全国民を母集団として算出したが、実際の対象者は1歳以上である。これは、過去1年間の実態をとるためには、1年前に出生している必要があるため。
- (3) 標本数 4,500
- (4) 調査地点数 150
- (5) 抽出方法 層化2段無作為抽出法
*全地点、指定地点でエリアサンプリングを行った。
- (6) 調査方法 調査員による訪問留置回収法
(15歳未満は、原則として親の代理記入)
- (7) 調査時期 平成20年8月7日～8月24日

注1：第9回昭和55年調査までは満18歳以上の男女が調査の対象であったが、第10回昭和57年調査から満15歳以上と対象年齢を3歳下げた。また、第21回平成13年度調査からは対象者を全国民とした。

注2：第18回平成10年度調査までは対象時期が9月～8月であったが、第19回平成12年度からは4月～3月としている。

4. 調査担当

社団法人 新情報センター

5. 回収結果

- (1) 有効回収数 3,181
- (2) 回収率 70.7%
- (3) 各地域別サンプル数、有効回収数、回収率
(人、%)

地域	サンプル数	有効回収数	回収率
北海道	199	143	71.9
東北	339	241	71.1
関東	1,461	1,011	69.2
甲信越	194	137	70.6
中部	571	410	71.8
関西	798	570	71.4
中国	271	191	70.5
四国	145	103	71.0
九州	522	375	71.8
計	4,500	3,181	70.7

6. 調査対象の特性

		(人数)	(%)
地域	全体	3,181	100.0
	北海道	143	4.5
	東北	241	7.6
	関東	1,011	31.8
	甲信越	137	4.3
	中部	410	12.9
	関西	570	17.9
	中国	191	6.0
	四国	103	3.2
	九州	375	11.8
都市規模	大都市	793	24.9
	中都市	1,344	42.3
	小都市	709	22.3
	町村	335	10.5

6. 調査対象の特性(つづき)

		(人数)	(%)
全 体		3,181	100.0
性別	男 性	1,550	48.7
	女 性	1,631	51.3
年 齢	0 ～ 5 歳	159	5.0
	6 ～ 11 歳	181	5.7
	12 ～ 14 歳	90	2.8
	15 ～ 17 歳	100	3.1
	18 ～ 19 歳	51	1.6
	20 ～ 24 歳	164	5.2
	25 ～ 29 歳	200	6.3
	30 ～ 34 歳	203	6.4
	35 ～ 39 歳	280	8.8
	40 ～ 49 歳	404	12.7
	50 ～ 59 歳	472	14.8
	60 ～ 69 歳	414	13.0
70 歳 以 上	463	14.6	
同居家族の人数	1 人 (自分のみ)	223	7.0
	2 人	729	22.9
	3 人	676	21.3
	4 人	792	24.9
	5 人	446	14.0
	6 人 以 上	310	9.7
不 明	5	0.2	
同居家族の形態	単 身 世 帯	223	7.0
	夫 婦 だ け の 世 帯	609	19.1
	夫 婦 と 親 の 世 帯	95	3.0
	夫 婦 と 子 供 の 世 帯	1,564	49.2
	親 と 夫 婦 と 子 供 だ け	484	15.2
	そ の 他	191	6.0
	不 明	15	0.5
世 帯 所 得	200 万 円 未 満	429	13.5
	400 万 円 未 満	831	26.1
	600 万 円 未 満	725	22.8
	800 万 円 未 満	441	13.9
	1000 万 円 未 満	236	7.4
	1500 万 円 未 満	148	4.7
	2000 万 円 未 満	24	0.8
	2000 万 円 以 上	14	0.4
	不 明	333	10.5

		(人数)	(%)
全 体		2,740	100.0
未 既 婚	未 婚	591	21.5
	既 婚 (配 偶 者 あ り)	1,816	66.0
	既 婚 (配 偶 者 な し)	252	9.2
不 明	92	3.3	
免 許 保 有	持 っ て い る	2,032	73.9
	持 っ て い な い	697	25.3
	不 明	22	0.8
職 業	農 林 漁 業	55	2.0
	自 営 の 商 工 業	275	10.0
	自 由 業	43	1.6
	管 理 職	103	3.7
	事 務 ・ 技 術 職	533	19.4
	労 務 ・ 技 能 職	381	13.8
	主 婦	703	25.6
	学 生	203	7.4
	無 職	444	16.1
	不 明	11	0.4

<「自営の商工業」「管理職」「事務・技術職」「労務・技能職」について>

		(人数)	(%)
全 体		1,292	100.0
休 日 制 度	週 休 1 日 以 下	70	5.4
	週 休 1 日 の み	227	17.6
	週 休 1 日 の 他 に 月 1 回 休	41	3.2
	週 休 1 日 の 他 に 月 2 回 休	127	9.8
	週 休 1 日 の 他 に 月 3 回 休	45	3.5
	週 休 2 日	671	51.9
	そ の 他	92	7.1
	不 明	19	1.5
有 給 休 暇 取 得 日 数	5 日 以 下	314	24.3
	6 ～ 10 日	183	14.2
	11 ～ 15 日	92	7.1
	16 日 以 上	74	5.7
	有 給 休 暇 は と ら な か っ た	228	17.6
	有 給 休 暇 は な い	369	28.6
	不 明	32	2.5
就 業 形 態	正 規 の 職 員 ・ 従 業 員	890	68.9
	パ ー ト ・ ア ル バ イ ト	96	7.4
	派 遣 社 員	28	2.2
	契 約 社 員 ・ 嘱 託	88	6.8
	そ の 他	158	12.2
不 明	32	2.5	

表 1. 過去 1 年間の実態 — 宿泊観光旅行

項目	宿泊観光旅行の実態
1)参加率	49.7%
2)参加回数 全体平均 参加者平均	1.05回 2.11回
3)実施月	8月が 16.8%でピーク
4)出発した日	平日 33.9% 土・日・祝 29.5%
5)主な目的	①見物・行楽 32.7% ②慰安旅行 31.7% ③スポーツ活動 9.5%
6)行動 (複数回答)	①温泉浴 50.9% ②自然の風景を見る 45.1% ③名所・旧跡を見る 30.2%
7)主な行動	①温泉浴 25.9% ②名所・旧跡を見る 10.4% ③レジャーランド・テーマパーク 9.5%
8)同行者	①家族 43.1% ②友人・知人 23.3% ③家族と友人・知人 13.3%
9)同行人数	①2～3人 33.9% ②4～5人 25.7%
10)利用交通機関 (複数回答)	①自家用車 48.9% ②貸切バス 22.3% ③JR鉄道 21.8% ④飛行機 11.4% ⑤私鉄 9.5%
11)宿泊施設	①ホテル 42.7% ②旅館 33.4%
12)宿泊数	平均 1.58泊
13)旅行費用	
総費用	39,480円
宿泊費	15,300円 注)旅行会社の募集团体
交通費	10,860円 及び「職場、学校」
土産の費用	5,020円 「地域宗教」の団体
観光行動費	7,890円 を除く

表2. 過去1年間の宿泊旅行の実態

旅行の種類	参加率	参加回数 (全体平均)	参加回数 (参加者平均)
全体	62.5%	1.99回	3.18回
観光旅行	49.7%	1.05回	2.11回
出張などの商用	7.9%	0.36回	4.61回
帰省などの私用	17.6%	0.43回	2.43回
兼観光旅行	8.3%	0.14回	1.72回

表3. 今後1年間の宿泊観光旅行の希望

1)参加希望率	76.5%	
2)参加希望回数	2.05回	
3)希望季節	秋 40.3%、 春 16.3%	
4)希望宿泊数	2.03泊	
5)希望費用	総費用	38,470円
	1人当り宿泊費	11,770円
6)希望する旅行の種類	①温泉観光	70.7%
	②リゾートライフを楽しむ観光	28.1%
	③祭りや観光イベント	24.6%
	④ドライブ観光	22.3%
	⑤寺社観光	19.4%

平成20年度調査のポイント

観光への理想と現実のギャップ深まる!?

本調査は、全国の4,500人を対象に、昨年度に国内旅行をどれくらい、どのように行ったかという実態と今後の希望について調査を行ったものである。昭和39年より、継続して実施している調査であり、国民の観光動向を40年以上のロングスパンで把握できる調査である。

平成19年度は、観光立国実現へのマスタープランとなる「観光立国推進基本計画」が6月に策定されたことや観光庁設立に向けての具体的な動きがあるなど、各地域における観光振興への期待が高まった年であった。また、7月には「石見銀山遺跡とその文化的景観」が世界遺産に登録され、近畿中国地方における観光への期待は高まった一方で、新潟県柏崎を中心とした中越地方では「新潟中越沖地震」が発生し、夏のピーク直前に大きな被害を受けた年であった。

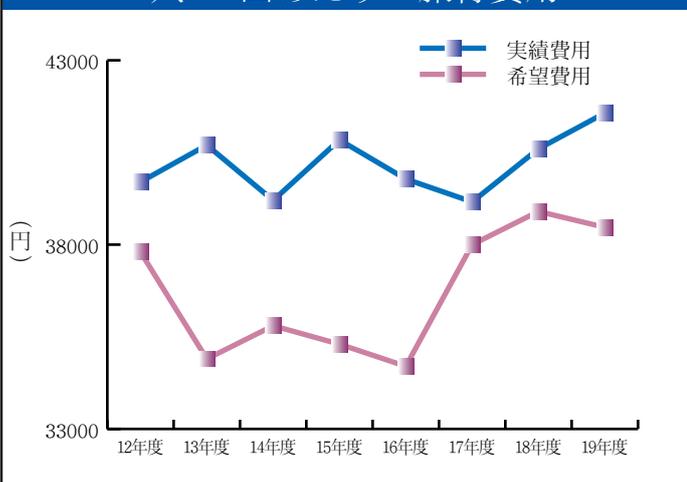
今回の調査の特徴として、「観光への志向が全体的に低下した」ということがあげられる。宿泊観光旅行への参加率は49.2%（対前年-3.0）、参加回数は1.06回（-0.13）、旅行費用は41,570円（+970）、宿泊数は1.58泊（-0.01）と、旅行費用以外は前回の調査結果を下回る結果となった。

宿泊観光旅行の今後の希望に関しては、参加希望率が76.5%（-2.1）、希望旅行費用が38,470円（-430）、希望宿泊数が2.03泊（-0.06）と、すべて前回の調査結果を下回る結果となった。

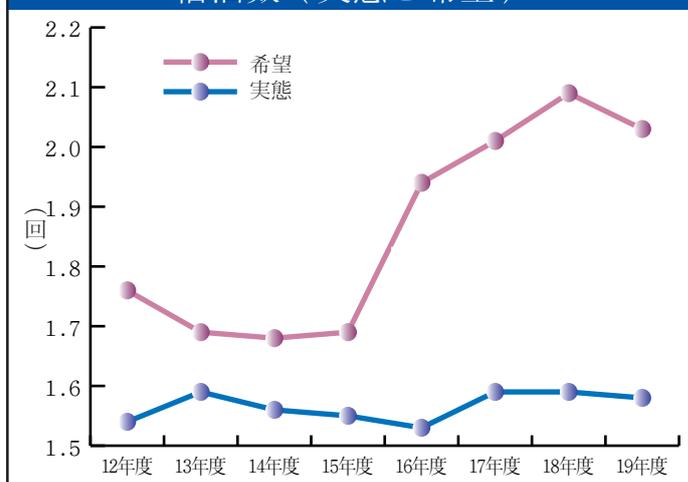
また、1人・1回あたりの旅行費用の実績と希望の差においては、平成19年度にはさらに広まり、理想と現実のギャップは拡大傾向にある結果となった。



1人・1回あたりの旅行費用



宿泊数（実態と希望）

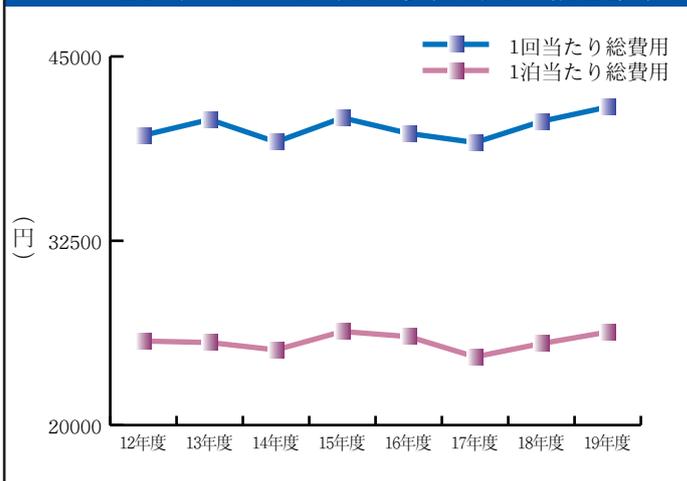


また、1回、1泊あたりの総費用においては、それぞれここ数年徐々に上昇している。今回の調査では、1回あたりが41,570円(+970)、1泊あたりが26,310円(+780)となっている。また、平均宿泊数は1.58泊(-0.01)と減少している。これらのデータから、長く宿泊をして旅行をするよりも、日数を短くして、その分中身を充実させて旅行をしようとする人が多いという傾向がみられる。

また、1回あたりの希望費用と実態費用の差が年々広がっていることも、今回の調査でわかった。この差が広がっているということは、理想と現実のギャップがそこにある。より低コストの旅行をしたいのだが、実際には、希望額よりも多い金額で旅行をせざるを得なく、参加率の減少に影響を及ぼしているとも考えられる。

しかし、宿泊観光旅行への参加率や宿泊数が伸び悩む中、国においては観光圏の整備による観光旅客の来訪及び滞在の促進を試みており、参加率及び宿泊数の増加が今後期待される。

1回・1泊当たりの旅行総費用及び宿泊費用



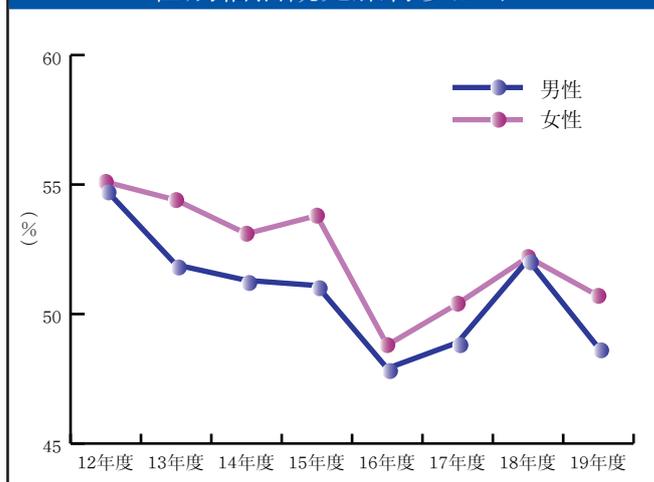
DATA

1 好調だった40代以降の年代にて大きく減少。

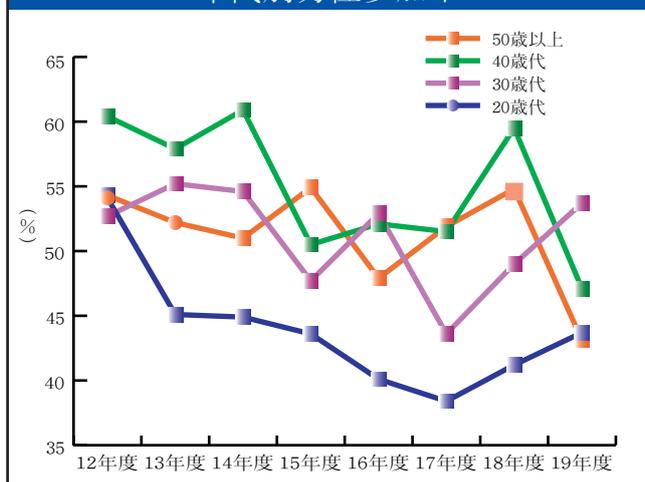
ここ数年増加傾向にあった宿泊観光旅行への参加率が今回の調査では、男女共に減少している結果となった。特に、男性における宿泊観光旅行への参加率の減少が目立つ結果となっており、40代以降の年代において男女とも大幅に減少し、好調だった男性の40歳代・50歳代の参加率が共に前回の調査から10ポイント以上下落し、40%台に落ち込む結果となった。

また、20歳代男性における参加率が2年連続増え、増加傾向にあるものの、平均を下回っており、平成12年に比べ大きく落ち込んでいる状況は変わらず、若年層における需要喚起が必要であると考えられるが、今回の調査では好調だった40代以降の年代においても大きく減少しており、今後はバランス良く需要を喚起していくことが重要であるとも考えられる。

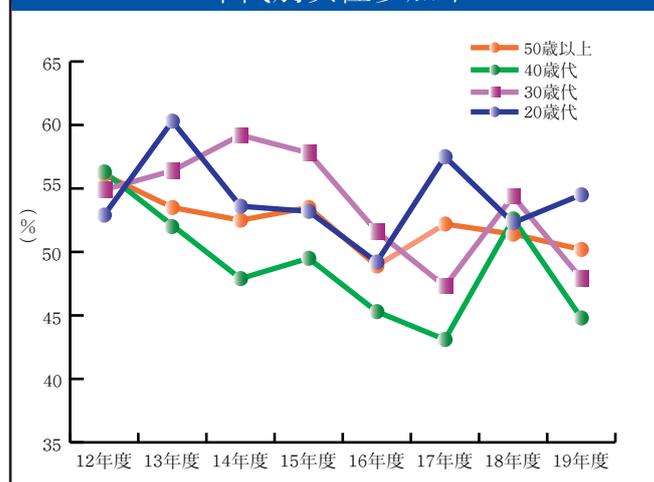
性別宿泊観光旅行参加率



年代別男性参加率



年代別女性参加率

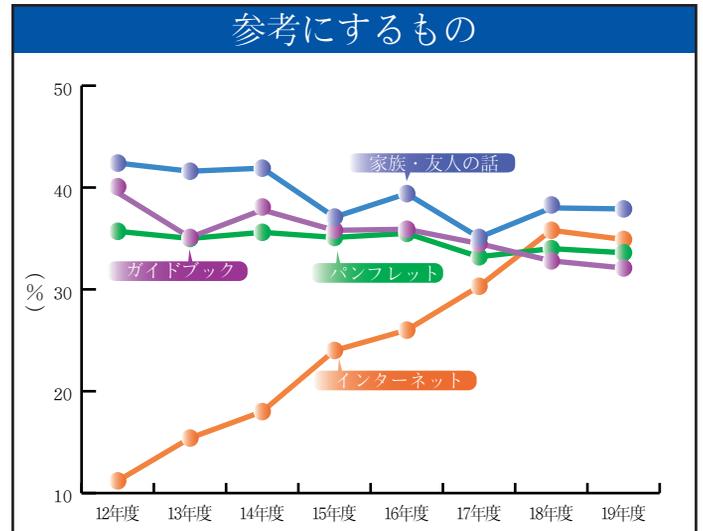


2 情報源は「インターネット」が躍進も、「家族・友人の話」が首位キープ！

旅行に行くにあたって、参考にする情報源は「家族・友人の話」が37.9%で、今回も最も多かった。これは昭和61年の調査開始以来変わらないことである。一方で、ここ数年伸び続けている「インターネット」が今回は少々減少しているものの、平成18年度に続き、ガイドブックやパンフレットを上回る結果となった。

また今回は、インターネットのこういった情報を参考に行っているのかということも調査した。一番多かったのは「インターネットでの広告」で19.2%、次いで「インターネットでの書き込み情報」が15.7%、「ブログからの情報」が2.1%であった。こうしてみると、旅行者は広告と同じ程度、書き込み情報も参考に行っていることがわかる。書き込みやブログによる情報は実際の経験による情報が得られることや常に更新等による旬な情報が得られることなど、リアルな情報を旅行者は求めていると考えられる。

現在は携帯端末機器によるインターネット環境も著しく進化しており、インターネットの活用のシーンが今後、増え続けていくことが考えられる。



3 ガソリン価格の高騰も自動車旅行がもっとも人気！

平成19年度にはガソリンの値段が1リター140円を上回り、自動車の活用に大きくダメージを受ける中、宿泊観光旅行でもっとも利用される交通機関は自家用車であり、平成2年に鉄道を上回って以降、常に1位であり、昨年同様、50%前後をキープしている。

また、レンタカー及びタクシー・ハイヤーの利用も徐々に増加しており、自動車を利用した旅行への需要は今後も伸びが見込まれる。

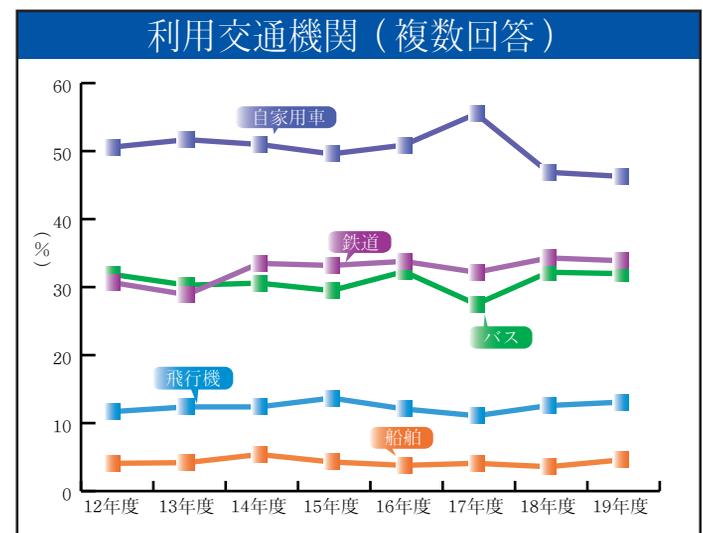
ひとり旅ではJRの利用が40%に上るが、家族や友人・知人らとの旅行で同行人数が14人以下の小グループ旅行では、自由度の高い自家用車がもっとも利用されている。

注)

自家用車： レンタカー、タクシー・ハイヤーは含まない

鉄道： JR、私鉄

バス： 路線バス、貸切バス



4 家族旅行がさらに伸びるか！？

だれと一緒にいくかについては、家族が最も多く、43.1%（前年度41.3%、前年度比+1.8%）であった。次いで、友人・知人の23.3%（前年度25.6%、前年度比-2.3%）となり小グループ旅行が約8割を占めている。

また、同行者の人数で見ると、「2-3人」（33.9人）と「4-5人」（25.7%）の小グループが約6割を占めており、気心の知れた家族や友人と少人数で旅に出かける傾向は例年と変わらない。自分ひとりでの旅行も4.6%（前年度3.8%、前年度比+0.8%）と増加の傾向が見られる。

その中で家族による個人旅行と友人・知人による個人旅行の比率の差が昨年に比べ広がっており、家族による個人旅行は平成12年度に比べ、増加傾向にあるに対し、友人・知人による個人旅行は減少傾向にあることが見られる。

一方、団体旅行の主流である職場・学校等の団体等は、6.8%（前年度7.3%、前年度比-0.5%）であり、一段と団体旅行が減少した結果となった。

